

日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第 99 号 (2026 年 4 月 1 日号)

発行者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25 名古屋学院大学外国語学部西村美保研究室内
日本ハーディ協会 jimu.thsjapan@gmail.com
編集者 山内政樹 〒275-0023 習志野市芝園 2 - 1 - 2 千葉工業大学



Stonehenge (2018 年 9 月編集者撮影)

海老根先生を偲んで

辻 建一

(TSUJI Kenichi)

毎年、年の瀬が近づいてくると、その年に亡くなった著名人を偲ぶ特集がテレビやネットなどで組まれます。2025 年に逝去した著名人の中で最も大きく扱われたのは、野球界やスポーツ界の枠を超えた 20 世紀後半を代表するフォークヒーロー「長嶋茂雄」でした。私にとっても、熱狂的な巨人ファンだった小学生時代、長嶋は王とともに神様のような存在でした。王の「ワンちゃん」に対して「チョーさん」と親しまれた長嶋は、いつのまにか「ミスタージャイアンツ」そして「ミ

スタープロ野球」という愛称に変わっていきました。そして「ミスタープロ野球」が他界した同じ年、私にとっての「ミスター英文学」が永眠されました。他ならぬ海老根先生です。

その卓越した英語力、該博な知識・教養はもちろんですが、何といても、あらゆるタイプの研究者たちのスタンスや特長を鷹揚に受け止めて理解・評価する度量の大きさという点で、海老根先生は比類なき教育者でした。海老根先生ご自身は、比較的オーソドックスな研究スタイルの学者だったと思いますが、新しい批評理論を取り入れた野心的な論文、あるいはいわゆる異端児的な研究者の業績なども、それらが英文学批評の発展に寄与するだけの価値ありと評価されたら、先入観や偏見を持つことなく、褒めたたえていらっしやいました。

私が初めて海老根先生の授業に接したのは、教養教育部時代の約40年前のことです。ヴィクトリア朝時代のメジャーの作家たちの主要作品を取り上げて、各作品についてとても丁寧に解説されていました。教養教育部時代受講した授業の中では、映画「巴里の屋根の下」を用いながら教授されていた蓮實重彦先生（長嶋氏、海老根氏と同じ1936年生）のフランス語の授業とともに、特に印象深いものでした。私は、蓮實先生に触発されて沢山映画を観るようになり、海老根先生に触発されて沢山イギリスの小説を読むようになりました。そして運命を感じるのは、海老根先生が紹介されたヴィクトリア朝小説の中で私が一番強く印象に残ったのが、「高慢と偏見」でも「嵐が丘」でもなく、「テス」だったのです。

その後英文学科に進学し、卒業論文を「テス」で執筆することをご報告したとき、海老根先生は「そうですか、実は僕がイギリス小説で特に好きな作家は、オースティンとハーディなんですよ」と、「我が意を得たり」とばかり嬉しそうにおっしゃっていたのが記憶に残っています。そして、普段の英文学科の授業の点数ではとても大学院へ進学など望めなかった私の卒業論論文を読んで、「お、これは見どころある」と評価してくださり、その後研究職の道に進ませてもらったのも、海老根先生のご指導のおかげでした。

海老根先生は作品のチョイスにもセンスが光っており、英文学科の授業では、「フランス軍中尉の女」や「ハワーズ・エンド」を取り上げられていました。もちろん二つともイギリス小説史上に残る傑作で、私の好きなイギリス小説ベスト10に入るものです。大学院の授業では、いくつかのゴシック小説やジョイスの「ユリシーズ」を教わりましたが、さすがに結構タフな内容でした（特に「ユリシーズ」）。

その後私が地元の金沢に戻ってから、「十九世紀「英国」小説の展開」をお送りいただいたとき、現職の金沢星稜大学で担当している「英米文学」の準備に大いに活用したく思います、とお礼を述べた手紙とともに「森八」の和菓子をお送りしたところ、「妻が石川県出身なので、「森八」のお菓子を懐かしそうに食していました」というお返事をいただきました。「十九世紀「英国」小説の展開」を読んだあと、ジェイン・オースティン、ブロンテ姉妹、チャールズ・ディケンズなどを取り上げた私の「英米文学」の授業はさらに人気が高まり、金沢星稜大学の教養教育の授業史上最高の630人余りの履修希望者がでました。海老根先生の後押しのもと、経済学を学ぶ地方の私立大学の学生たちに、イギリス小説の魅力を教授する伝道師としての役割を果たせたことが、私にとって海老根先生への恩返しとなった気がしています。

海老根先生が逝去された3日後に、日本サッカー界のレジェンド釜本邦茂氏が亡くされました。日本が銅メダルを取ったメキシコオリンピックでの釜本選手の雄姿は、よく覚えています。さらに12月には、ゴルフ界のレジェンド尾崎将司氏逝去のニュースも飛び込んできました。私の記

憶の中で、昭和天皇が崩御された 1989 年が、手塚治虫、松下幸之助、美空ひばり、松田優作、そして海外ではカラヤンといった各界のレジェンドが次々この世を去った最も印象的な年だったのですが、スポーツ界の巨星たちと英文学界の巨星海老根先生が旅立たれた 2025 年もまた、それに匹敵するくらいの特別な年となりました。スポーツ観戦とイギリス小説をこよなく愛する私からも、僭越ながら心より哀悼の意を表させていただきたく次第です。

海老根宏先生について思い出すことなど

永富 友海

(NAGATOMI Tomomi)

海老根先生の訃報に接したのは 2025 年 8 月中旬で、予想外の知らせに意表を突かれました。一昨年頂いた賀状には「通院の結果、腎臓機能の数値が少しずつ良くなっています」と記されており、そのときも体調を崩されていたとはつゆ知らず、驚きつつも「良くなっている」という言葉にすっかり安堵し、その言葉を裏付けるかのように先生の勢いのある筆致もいつも通りでした。大学院の授業で、また就職後に偶に学会などでお目にかかる機会があったときにも、海老根先生の弱っておられるお姿を目にしたことがなく、体調不良による休講などということも一度もなく、背筋を伸ばして大股ですっすと歩いて行かれる長身の先生は、威風堂々たる大先生であるはずなのに、纏っておられる空気感はとても若々しく自由でした。何か質問をすると、少し首を傾げてからおもむろに、うん、そうですね、「僕」はね、という語り口調と、話し始められるとき一瞬ふやっとなる様子が、海老根先生の大上段に構えない、どこか青年のはにかみのようなものを思わせる独特の癖として強く脳裏に刻まれています。

本郷の大学院で修士の二年間、博士課程の一年間を過ごしたところで留学が決まり、帰国すると海老根先生はすでにご退職され、東洋大学に移られたあとでした。在学中の三年間の授業で先生から教わったのはゴシック小説と *Ulysses* で、先生のご専門であるヴィクトリア朝の正典作家についてまったく教わっていないということに気づく暇もなく、次々と課される長いテキストをひたすら読み続けながら 19 世紀小説と向き合っていくことの多難さを実感し、*Ulysses* の授業にいたっては、先生が手元に広げておられる膨大な予習のノートをただただ茫然と見つめているだけでした。批評理論が花盛りの 90 年代に学生たちが各々の関心の赴くまま好き勝手な発表をするなか、海老根先生の態度はつねに寛容で、知ったかぶりや表面的な取り繕いを良しとしない、真摯な研究者のそれでした。

就職後は研究についてのやりとりがほんの少しはできるようになり、もしよければ同人になりませんかとお声掛けいただいて『英国小説研究』のお仲間にも加えていただきました。先生の退官論集出版にあたっては、海老根先生主催の昼食会に執筆者が招待されるという嬉しいご褒美をいただけたのも忘れ難い思い出のひとつです。それにもまして、先生の代表的な論考が所収された『英国一九世紀小説の光景』はこの分野の研究の道しるべがふんだんに盛り込まれてありがたいとしか言

いようがなく、ブロンテもディケンズもジョージ・エリオットもすべて、徹底的にリアリズムとして読み尽くそうとされる先生の強靱な意志に息をのみながら、レイディ・パートラムについての「他人に悪意を抱くような面倒なことはしない」といった寸評には思わずくすりと笑ってしまい、海老根先生は怠惰で自己充足的なレイディ・パートラムとは似ても似つかぬ人物ながら、そうか、先生が他人に悪意を抱いたりされないのは「面倒」だからだったのかと妙に納得を覚えたりしています。「あの本はエンターテインメントとして読んでくだされば本望なので、つまらないものは途中で止めて下さい」という海老根先生のお言葉に、おそらく寄り添うような読み方ができているのではないかと思う次第です。

レイディ・パートラムの突き抜けた性格造形で思い出したのが、院生の頃、留学の推薦状の件で先生に早急に連絡をとらせていただかねばならない必要が生じ、緊張でがちがちになりながら勇気を振り絞って電話をかけさせていただいたときのことです。電話には静江先生が生まれ、「少々お待ちください」とのお言葉にふっと一息つこうとした途端、間髪入れずに「はい、海老根です」と先生が電話口に出てこられ、思わずわっと声を上げそうになりました。きっとおふたりで一緒にくつろいでいらっやったところだったのだろうと受話器を置いてから想像したのですが、海老根先生の行動には、ときに巧まらずしてひとの意表を突くようなところがありました。そんなおかしみも滲えつつ、やはり海老根先生のどっしりとした存在感あつての大学院生活であつたことを懐かしく思い出します。同期の友人たち6、7名とわいわい言い合いながら丸ノ内線の御茶ノ水駅で降り、駿河台の坂を下って神保町に通い詰めていたこと、うちひとりの大学近くの西片の下宿にみんなで押し寄せ、将来の憂いはとりあえず棚上げにして始発の電車の時間までとりとめもなく語り合っていたこと、知の世界の入口で、大学院生とは名ばかりのわれわれが子どものように戯れていたあの幸福な時間は、海老根先生が揺るぎない「先生」でいてくださったからこそ可能になりえたものです。

そんな立派な先生の薫陶を受けながら、教師生活も終盤に差し掛かり、いい歳をしてなお、自分は先生ごっこをしているだけでないかという頼りない気分から抜け出せずにいる始末です。先生という知の支柱を失い、とても寂しいです。海老根先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

那須雅吾先生を偲んで

北脇 徳子

(KITAWAKI Tokuko)

那須雅吾先生は友達を大切にされる愛情深いお人柄でした。故郷岡山の幼友達や高校時代の旧友とは、手紙のやり取りや電話ですっとお付き合いをされていて、「この前、幼友達から相談されてね」とか、「岡山から友達が訪ねて来てくれてね」とよく仰っていました。先生の岡山愛は、「十九世紀英文学研究会」を橘智子先生が勤務されていた川崎医療大学で開催した翌日、倉敷にある「塩

田王」の「旧野崎家住宅」へ皆を案内して、誇らしげに沿革や歴史を説明して下さったその言葉の端々に伺えました。

同志社大学に入学されてからは、学生時代と母校で教鞭を執られてきた年数を合わせると 48 年間、先生はまさに人生の半分を同志社と共に歩んでこられました。厳しい指導で有名な上野直蔵先生の下で、那須先生の言葉を借りれば、「四年間の悪戦苦闘」の末、「サッカーの英雄観」というタイトルで修士論文を提出されました。この時に上野先生から受けられた、「世界で誰も書いていないものを書け」という厳しい薫陶は、骨身を削って修士論文と格闘された記憶と共に、那須先生の心の奥深くにまで強く沁み込んでいたのだと思います。ご自身の文学研究のモットーもまさに独自性、オリジナリティを貫くことでした。那須先生が 78 歳の時に執筆された『ケンブリッジの空は晴れていた』という自叙伝の「私の研究遍歴」の中にも、その精神を伺い知ることができます。

那須先生がハーディ研究を始められたのは、1964 年に同志社女子大学で第 7 回日本ハーディ協会大会が開催され、『『テス』の自我について』というタイトルで発表されてからでした。それ以降ずっと一貫してハーディ研究に取り組んでこられました。また、日本ハーディ協会の初代会長大沢衛先生を、師と仰いで尊敬されておられました。那須先生から、大沢先生が日本のハーディ研究の第一人者であり、どんなにご立派な研究者であるかを、度々、伺っておりました。

那須先生は 1975 年 7 月から 1 年間、ケンブリッジ大学の特別研究員として英国で研究生活をされました。この時期をご自身の人生の中で一番大切にされていて、自叙伝のタイトルにもされています。ケンブリッジでは、「こころの言葉」(先生の造語)を使って、さまざまな職種の人たちとの交流や、友達の相談に乗ったり、スコットランドまでお見舞いに行ったりと、国際的な交友関係を築かれました。

帰国される 1 カ月前に、3 年後のハーディ大会の特別講演の打ち合わせのために、デズモンド・ホーキンス氏に会いに行きたくて欲しいという大沢先生のご依頼を受けて、ドーセットに出向かれました。それも日本の研究者仲間を誘って一緒に旅をされているので、那須先生の友達思いに頭が下がります。ところが、ホーキンス氏から、ハーディ誕生祝賀会が開催されるので、日本ハーディ協会の代表として、ハーディ像に花輪を捧げて、簡単なスピーチをして欲しいと頼まれ、先生は一晚ほとんど寝ないでスピーチの準備をされる羽目になりました。このエピソードは、先生から何回かお聞きしていましたが、「金美齢女史から褒められた」と嬉しそうに仰っていたことだけしか記憶に残っていませんでした。自叙伝を読み返してやっと全貌がつかめました。

那須先生は教え子の面倒もよく見て下さいました。初めて先生にお会いしたのは、私が大学を卒業してから 9 年後に大学院に入学した 1980 年でした。年下の同級生が、学部の際に先生のハーディの授業を受け、ハーディを修士論文のテーマにしようと思っていたので、私も一緒に、先生の研究室にお邪魔して「毎週先生の研究室に伺いますのでご指導をよろしくお願いします」と頭を下げると「いいですよ」と笑顔で引き受けて下さいました。今から思えば、先生は公私共に一番忙しい時期だった筈です。私たちの厚かましい願いを聞き届けて下さった先生の度量の広さに本当に感謝しております。

先生は、研究室での指導を発展させて、もっと多くの仲間と切磋琢磨してハーディ研究を充実させようと、1986 年に「十九世紀英文学研究会」を発足させて下さいました。先生は大榎茂行先生と高橋和子氏の 3 人で、会則の作成、代表、会計、書記の任務を記し、発表と司会兼連絡係を全員に平等に回すという基本方針などを決めて、準備を整えてから、西村寛子氏と私を加えて下さいま

した。研究会も今年で40年目を迎え、会員数も徐々に増え、5冊の論文集を出版するまでになりました。

最後に、先生に作成して頂いた写真について感謝の意を込めてお伝えしたいと思います。先生は数多い蔵書の中に、イギリスの古い写真入りの書物をお持ちで、それを印刷の製版用に写す道具を購入されていました。『「テス」についての13章』中の数枚のイラストと表紙、後に続く論文集の3冊の表紙、私が本紙の編集を担当した時の全ての巻頭写真は、先生の製作です。書物の図版を印刷用に写し取るための作業は大変な労力と時間がかかったそうですが、先生はそれを「本日、何とか例の写真発送できほっとしております」とだけ認めて、送って下さいました。私は先生にかなりのご負担をおかけしていたことに、その当時は思い至らずご厚意に甘えておりました。研究会に出席されなくなってからも、翌日の研究会の電話での報告を、興味深く聴いて下さっていました。最期まで研究会を見守って下さった那須先生がお亡くなりになって、寂しさが募ってまいります、今度は私達が若い研究仲間達に先生から受けたご恩情のお返しをしたいと思っております。那須先生、どうぞ安らかに眠り下さいませ。

那須雅吾先生を偲んで——敬意と感謝を込めて

渡 千鶴子

(WATARI Chizuko)

2025年10月留守電に那須雅吾先生のご子息からメッセージが入った。帰宅後お電話すると、ご子息が、「父が10月3日享年93歳で眠るように逝きました。すでに通夜と告別式を執り行いました」と仰った。衝撃が走り、すぐにハーディ協会と十九世紀英文学研究会に連絡をした。

那須先生はハーディ協会の運営委員を長年務められてご多忙でありながら、1986年春、十九世紀英文学研究会を創設なさった。85年秋、ハーディ大会での発表をご高聴くださっており、「研究会の会員になりませんか」とお誘いくださった。しかし二つ返事のできない消極的な私が会員になるのはその1年後であり、この態度は30年近く尾を引くことになった。

研究会に入会して間もないころ、ハーディ大会のプログラムから、大会の翌日に先生の稀観本に関する講演があることを知っていた。それで大榎茂行先生とともに拝聴した。中央大学の図書館が所収するハーディの稀観本をご存じの方は多いだろうが、先生の場合、ハーディは元より多くの文学書を揃えておられた。この収集はケンブリッジ大学のシニア・メンバーとして留学なさったときに始まっていた。初版のもの、著名な出版社のもの、著者のサイン入り、有名なイラスト入り、千部、百部の限定本など、その数は膨大であった。先生は、研究の必須条件として「好奇心・慎重さ・想像力・オリジナリティ」を挙げておられるが、稀観本の収集は、この飽くなき「好奇心」の表れであろう。

1991年ごろ、研究会の研究成果として『テス』に関する論文集を発刊する話が持ち上がり、会員たちは自分のタイトルを挙げることになった。ハーディ大会で『テス』に関する発表をして間が

なかった私はお手上げで、他の会員たちのようにタイトルを上げることができずに落ち込んだ。最初の論文集である『「テス」についての13章』のタイトルを決定するまで、苦心惨憺なさったと伺ったとき、先生の「慎重さ」に触れたと思った。そして、このタイトル表記を踏襲して、その後の研究書のタイトルが決まっていることを考え併せると、先生の先見の明に頭が下がる。

1992年ハーディ大会のシンポジウムのパネラーは、先生を筆頭にした研究会の重鎮であった。『日本ハーディ協会ニュース』の大会印象記をたまたま執筆していた私に、先生からお電話があった。「シンポジウムで僕はこんなことを言っていない。おかしいのではないか」と指摘を受けてまた落ち込んだが、説明をすると納得してくださった。

1998年『人間の証しを求めて』を上梓なされた。ご高著は、「ハーディ文学の持つ不思議な魔力、魅力」に取りつかれた先生の「悪戦苦闘」の証しであり、「新たな作品解釈を目指して挑戦」なされた「1章を除いてすべて書下ろし」という貴重な単著である。

2007年発行の『トマス・ハーディ全貌』に、「トマス・ハーディと日本」のご論考がある。「グリープ家のバーバラ」と『春琴抄』の影響関係が論じられた第2節、なかでも言語、文の構成、形式などの技法的なことや、語りの手法の箇所は、拙論「「グリープ家のバーバラ」と『春琴抄』に見る芸術観と結婚観」（『英語・英米文学の視座』2005年）で迎った内容と多少なりとも重なった。先生にこのことをお伝えすると、「アプローチが似ていたのだね」と仰った。初めてお褒めの言葉を頂戴できたように思えた。

「そろそろ役員に推挙しようと思うのだが」と仰ったときも、「開催校の経験があるのなら、ハーディ協会でも開催校を引き受けたらどうだ」と仰ったときも、まだ積極的になれなかった。しかし馬鹿を重ねた私は、本紙の編集を担当した時期に、印刷と製本以外はすべてご自身で作成なされた『ケンブリッジの空は晴れていた』（2011年）を、本紙の〈内外ニュース〉に掲載したいと思い切って申し出た。しかし、「本書は自分史を中心にしているために公にはできない」と断れてしまった。

それでも、2016年の特別講演（「ハーディとともに五十年—近代文明の警鐘者として—」）はご快諾を得、『ハーディ研究』への特別寄稿論文の承諾も得て安堵した。この憑憑論文は、ハーディの「文明開化」の問題に焦点を当てて、『帰郷』を中心に論じられていた。このことやお電話の内容から、当時先生が最も深く関心を持たれていた作品は『帰郷』であると分かりそうなものだ。だが不覚にも、2023年に別の論文集を謹呈するという失態を演じてしまった。先生から、「書籍が郵送されてきたが、『帰郷』の論文集でないのはなぜなのか」と問われて初めて、研究会から発行される予定の5冊目の論文集を、首を長くしてお待ちくださっていたのだと思い当たった。

2024年『「帰郷」についての10章』をお届けしたとき、ご子息から、「研究会の書籍をたびたび手に取って何度も読んで、とても喜んでいきます」とお聞きした。たとえ「オリジナリティに欠けているじゃないか」と叱責を受けても、先生のお声をお電話で拝聴したかったとの思いが残っている。

那須雅吾先生、どうか安らかに眠りください。

第 68 回大会印象記

研究発表・総会・シンポジウム 報告

亀澤 美由紀

(KAMEZAWA Miyuki)

日本ハーディ協会第 68 回大会は、2025 年 10 月 25 日、阪南大学あべのハルカスキャンパスにて開催された。以下、当日の様子を二人の書き手によって報告したい。

大会は麻島徳子氏の研究発表「エグドン・ヒースを司るもの——『帰郷』にみる作者機能の特異性」で始まった（司会：高橋路子氏）。Wessex Novels を再編集するにあたってハーディがとった作家戦略に麻島氏は注目する。『帰郷』に、エグドン・ヒースを記録し「ウェセックスの歴史家」たらんとする語り手の視点と、出版業界や貸本市場の制約に対応を迫られる「職業作家」としての自己検閲的語りとが併存している。そしてその二重性が、抑圧的でありながらも、読者に多様な解釈の余地を開く装置として機能することとなり、やがてそれがのちの全作品に通底する語りの特徴となっていったと結論づけた。

昼食をはさんで総会が開催され、西村美保事務局長の司会で会計報告や編集委員会報告等がなされたあと、午後の部が始まった。シンポジウムは「ハーディをどう読むか——若手研究者を中心に」と題して坂田薫子氏の司会のもと、四本の論文が発表された。永盛明美氏は詩「フィドル弾き」「ジュリー・ジェーン」「カントリーダンスの一時停止で」、短編小説「リール舞曲を弾くフィドル弾き」を取り上げて、ダンスや音楽が踊り手を歓喜・高揚させる一方で、社会規範からの逸脱を促すと指摘。そして女性の踊り手にのみ破滅や死が訪れるという結末を捉えて、ここに性的不均衡を伴った農村共同体の構造が露呈されていると述べる。音楽とダンスはハーディにおいて、田園的「喜び」の象徴であると同時に、人間の深層に潜む欲望と社会的束縛を映し出す装置として機能していると結んだ。次に廣瀬絵美氏は 19 世紀後半の英国民謡復興運動に言及したのち、『はるか群衆を離れて』においてハーディが歌とコミュニティの関係性を丁寧に描いていると分析する。ハーディの作品において、歌は人々を感情的に繋ぎ、物語を紡いでいく力をもつと指摘。民謡復興運動に通ずるメッセージがこの小説に描き込まれているとして、論を締めくくった。続けて加藤彩雪氏はハーディの生命観が D.H. ロレンスに継承されていることを論じた。ハーディ作品に見られる即興的に動く身体描写が、ロレンスの身体表現と通底している点、また、両作家が「動く細胞」のイメージを通して生命の動態を描き出している点を、ハーディからアラベラを例にとって指摘。ロレンスの生命思想はベルグソン哲学やフォービズム等の影響のもとで論じられてきたが、そこにはハーディの生命描写が果たした役割が大きいとして、ハーディからロレンスへの思想的継承を明らかにした。最後に坂田氏の「アセクシュアルとしてのスー・ブライドヘッド——『日陰者ジュード』と解釈的不正義」が論ぜられた。坂田氏は、スーがヴィクトリア朝では認知されていなかった「アセクシュアル」であったとの想定のもと、スーがミランダ・フリッカーの命名した「解釈的不正義」によって苦しめられていたという読みの可能性を唱えた。以上、登壇者四名の論考を拝聴して、踊り・奏で・歌う身体への関心、生命としての身体を接写する視線、あるいは生命の源たる

「性」の解釈の困難に対する問いかけなど、身体とテキストの関係に迫る新たな展望の広がりを感じた。

さて大会の締めくくりは原田範行氏に特別講演を頂いたが、こちらの報告は麻島氏にお願いするとして、その前に、私から最後にしかし最大の賛辞を、あの素晴らしい環境を提供して下さった阪南大学の杉村醇子氏と、てきぱきと働いて下さった素敵な学生さんたちにお送りしたい。

特別講演 原田範行氏「トマス・ハーディと英文学教育成立事情」報告 伝統と革新の英文学教育あるいはハーディ文学

麻島 徳子

(ASAHATA Noriko)

日本ハーディ協会第68回大会の特別講演は、向井秀忠氏の司会のもと、原田範行氏によって「トマス・ハーディと英文学教育成立事情」と題して行われた。本講演は、19世紀後半という英文学がイギリスの高等教育機関において一つの学問分野として確立していく時代状況を背景に、ハーディ文学と英文学教育成立との密接な関係を明らかにするものであった。

講演の冒頭で原田氏は、ジョンソン『英語辞典』(1755)における「文学」の定義を起点に、18世紀から19世紀にかけて「文学」という語の意味領域が次第に狭義化していく過程を示された。また、この概念変化に伴い、「英文学とは何か」「英文学のなにを教えるべきか」という教育的課題が浮上し、19世紀から20世紀前半にかけて大学での英文学教育が本格化していったことが確認された。配布資料では、各大学における英文科成立の概要が一覧化され、その広がり具体的に示された。

1840年生まれのハーディは、まさにこの英文学教育成立期に生きた作家である。1862年に建築家を志してロンドンに出たハーディは、キングス・カレッジ・ロンドンの夜間講座に通った経験を持ち、当時の英文学をめぐる時代的変化を身近に感じていた可能性が指摘された。作家として成功したのち、ハーディは『ジュード』(1895)に対する激しい批判を受け、小説家としての活動を断念するに至る。

原田氏は、1895年を分水嶺とする文芸批評史の議論を踏まえ、『ジュード』批判の特徴として、①社会秩序の安定を強く求める姿勢、②小説を文学の下位ジャンルとみなしつつその影響力を警戒する態度、③批評の主な舞台がジャーナリズムであった点の三点を挙げた。これらは当時の英文学教育をめぐる言説とも相似形をなしており、英文学の大学教育における位置づけをめぐる議論も同様の文脈にあったのではないかと分析された。

1895年前後において、伝統的な教養教育を重んじるオックスブリッジでは古典的英文学観が維持される一方、他大学では文学概論や理論を重視する革新的な英文学観が形成された。また、英文学教育を担った人々はアカデミズムとジャーナリズムの双方に関与しており、その未分化性が文学をめぐる公共圏的議論を可能にしていた点も指摘された。

最後に、1905年から1925年にかけてハーディが複数の大学から名誉学位を授与された事実に触れ、そこにはかつての『ジュード』批判に見られた反発がもはや存在せず、授与に際しては作家とジャーナリストの人的ネットワークが影響していたことが示された。原田氏は、こうしたアカデミズムとジャーナリズムの融合の中で、英文学教育が「伝統」と「革新」を包摂していった過程を明

らかにし、ハーディ文学もまた牧歌的保守性と思想的革新性を併せ持っていた点にこそ特質があるとして、両者の密接な関連性を示し、講演を締めくくられた。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度（2025年度）の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、2025年度の会費は4000円です。すでにお伝えしているように、2026年度（2026年4月～2027年3月）から年会費は5,000円（学生・大学院生は年1,000円）となりました。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいております。とくに役員の方にはご協力いただけますと幸いです。顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。なお、会費を3年間滞納なさいますと退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振替えください。会費納入用の振替用紙は、9月の『ハーディ研究』送付時にお送りいたします。

登録内容の変更について

勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更がありましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただきますようお願いいたします。様式はホームページにアップされておりますので、ダウンロードの上、必要事項を記載後、事務局へ送付願います。

次回大会について（研究発表募集）

次期大会は、今年の10月31日（土）に千葉工業大学 津田沼キャンパス（〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1）にて開催されます。研究発表にご応募の方は4月30日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は600字程度、英語で発表される場合は150語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は25分で、10分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、新井潤美（めぐみ）先生（東京大学文学部教授）です。海外での豊富な経験をお持ちで、階級、郊外、ナショナル・アイデンティティなどのテーマで、ロマン主義の時代から、ヴィクトリア朝、エドワード朝、その後の小説まで、批評書や論文を多数書かれておられ、幅広く精力的に活躍されています。大変興味深いお話を聴くことができると期待しております。

シンポジウムは、ヘンリー・ジェイムズ協会とのコラボで、金子幸男先生（西南学院大学教授）が中心になって準備を進めています。パネリストはハーディ協会から杉村醇子先生（阪南大学教授）、麻島徳子先生（大阪成蹊短期大学）、ジェイムズ協会から、宮澤優樹(ゆうき)先生（金沢大学准教授）、松浦恵美（めぐみ）先生（日本大学講師）です。テーマは、「ハーディとジェイムズにおける変容の諸相——怪奇小説、新しい女、プロフェッショナルリズム、創作作法」（仮題）です。内容等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

《内外ニュース》

会員による著訳書：

永盛明美『眼差しの詩学——トマス・ハーディに見るジェンダー表象の一側面』（英宝社、2025年3月）

Neil Addison, *Thomas Hardy's Optimism: Hope and Joy in Hardy's Poetry.* (Palgrave Macmillan, 2025)

東雅夫・下楠昌哉（責任編集）、西川貴子、森口大地、友田奈津子、円浄ゆり、金津和美、池末陽子、斎藤彩世、吉田朱美、山辺省太、金谷益道、遠藤徹、野田ゆり子、諏訪暁（著）、『幻想と怪奇の英文学Ⅴ 関西疾風編』（春風社、2025年10月）

上原早苗『大衆検閲の時代——ヴィクトリア朝の道徳主義とハーディ』（名古屋大学出版会、2025年11月）

金子幸男『英文学・風俗画にみる田舎のイングリッシュネス——一九世紀のカントリーハウスとコテージというホーム』（小鳥遊書房、2026年3月）

『トマス・ハーディを読む』 日本ハーディ協会編、（音羽書房鶴見書店、2026年2月）

《編集後記》

協会ニュース第99号をお届けします。冒頭の写真はコロナ前に訪れたストーンヘンジの様子です。ご存じの通り、ストーンヘンジはテストとエンジェルの関係が終わる最後の場面で描かれます。また同時に、エンジェルとテストの妹であるライザー・ルーの関係が新たに始まります。終わりの始まりの場所です。ただ、エンジェルとルーの物語は、テストとエンジェルのそれとは違って、おそらく読むに堪えないものになると考えられます。昨年は海老根宏先生、そして那須雅吾先生がお亡くなりになりました。お二人のいないハーディ協会が読むに堪えない、聞くに堪えないものにならないように、残された我々会員がさらなるハーディ研究に取り組むべきだと感じました。折しも、次号は第100号になります。会員の皆様の投稿をお待ちしています。

海老根先生、那須先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今号は、海老根先生への追悼エッセイ2本と那須先生への追悼エッセイ2本を掲載いたしました。ご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。次号は2026年9月発行予定で、投稿の締め切りは2026年7月10日です。論文、随筆は2,000字程度、短信、個人消息は500字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。（編集者の責任で内容を編集する場合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。）ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第99号

HP公開日 2026年4月1日

編集者 山内 政樹

(YAMAUCHI Masaki)
